

渡り鳥と湿地に関する普及啓発活動の手引き ～イベントの開催と普及啓発パンフレットの作成にあたって～

2021年10月

バードライフ・インターナショナル東京

バードライフ・インターナショナル東京(以下、「バードライフ東京」と表記)では、湿地や渡り鳥の認知度向上と、湿地に関わる人々の協力体制の構築に向けて、佐賀市と協力して湿地に関するイベントを開催し、普及啓発用のパンフレットを作成しました。2021年4月に佐賀市で開催されたシギチフェスにおいて、普及啓発のためのパンフレットの作成・配布、動画セミナーや湿地の紹介ブースの設置を行いました。

本報告では、今後の各地でのイベントの開催や活動の参考のために、今回の活動内容や進め方、成果や今後に向けた課題についてまとめました。

なお、活動の実施にあたっては、佐賀市環境部環境政策課の皆様には企画段階から多岐にわたってご尽力頂きました。周南市鶴いこいの里交流センター、大崎市産業経済部世界農業遺産推進課の皆様にはパンフレット作成とイベントでのブース展示の準備において多大なるご協力を頂きました。いきものパレット様には、パンフレットの作成にあたってイラストやデザインをご準備して頂きました。また、NPO 法人バードリサーチの守屋年史様、荒尾干潟水鳥・湿地センターの中村安弘様、日本野鳥の会佐賀県支部の中村さやか様には動画セミナーの開催にあたって動画をご準備頂きました。なお、本活動は大成建設自然・歴史環境基金の助成を受けて実施しました。この場を借りて、感謝申し上げます。

目次

1. 活動背景・目的・概要	1
1.1. 背景と目的	1
1.2. 概要	1
2. 活動内容	2
2.1. 普及啓発パンフレットの作成と配布	2
2.2. イベントでの活動	3
3. スケジュール	6
4. 成果	7
5. 課題と今後に向けて	8
6. 問い合わせ先	9

1. 活動背景・目的・概要

1.1. 背景と目的

渡り性の水鳥は、生息地の消失と質の低下に伴い、急激に個体数が減少しています。その保全のためには、それらの鳥類が子育てをする繁殖地、渡りの途中で休憩し餌をとる中継地、冬越しをする越冬地を含めた渡り経路全体(フライウェイ)で、鳥たちの生息地を保全する必要があります。日本が含まれる東アジア・オーストラリア地域フライウェイ(East Asian-Australasian Flyway; 以下、「EAAF」と表記)は、ロシア東部やアラスカから、東・東南アジア、オーストラリア・ニュージーランドまでを含んだフライウェイです。このフライウェイには、世界的にみても多くの水鳥が生息する一方で、絶滅の危機に瀕している種も少なくありません。EAAF には東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ(East Asian-Australasian Flyway Partnership; 以下、「EAAFP」と表記)という国際的な枠組が存在し、EAAF を利用している渡り性水鳥及びその生息地を保全するための活動や取組を進めています。現在、EAAF 内では 140 ヶ所以上の湿地が、渡り性水鳥にとって国際的に重要な湿地として認定され、EAAFP の「渡り性水鳥重要生息地ネットワーク」に参加しています。このように、湿地やそこに生息する渡り性水鳥を守っていくためには、フライウェイ全体で連携し、湿地間のつながりを強化することが重要ですが、そのような活動や仕組みは十分であるとは言えません。そこで、本活動では、湿地・地域間の連携や交流を促進することを目的に、複数の渡り性水鳥重要生息地ネットワーク参加地と協働して、イベントを開催し、普及啓発資料を作成しました。

また、湿地は渡り性水鳥の重要な生息場所であるだけでなく、食料や水の供給や水質浄化、自然災害による被害の低減などを通じて私たちに恵みをもたらしてくれます。湿地の保全を進めるには、一部の愛好家だけでなく、多くの人に関心をもってもらうことが重要で、様々なステークホルダーと連携して地域全体で活動に取り組む必要があります。そこで、湿地に関する普及啓発資料を作成するとともに、各地域の湿地やその恵み、湿地に生息する渡り鳥を紹介するブースの設置や講演会の開催を通じて、多くの人に渡り鳥や湿地について知ってもらう機会を創出することとしました。湿地の保全に携わる人と湿地にあまりなじみがない人をつなぎ、湿地の保全と持続可能な利用を進める協力体制の構築を目指しました。

1.2. 概要

佐賀県佐賀市にある東よか干潟は有明海の干潟の一部で、EAAFP の渡り性水鳥重要生息地ネットワークにも参加しているほか、ラムサール条約湿地にも登録されています。国内でも有数のシギ・チドリ類の飛来地で、春と秋の渡りの時期や冬の越冬期にはシギ・チドリ類をはじめ多くの渡り性水鳥が東よか干潟に飛来します。2020 年 10 月にはビジターセンター「ひがさす」が開館し、東よか干潟の価値や魅力を発信し、観光・学習・交流などさまざまな活動の拠点になっています。

また、2019 年より、渡り途中のシギ・チドリ類を多く観察することができる 4 月もしくは 5 月に「シギチフェス」というイベントを開催しています(2020 年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止になりました)。佐賀市、日本野鳥の会佐賀県支部、佐賀野鳥の会が主催し、佐賀大学農学部浅海

干潟環境学研究室やシギの恩返し米プロジェクト推進協議会などが協力し、探鳥会や工作などの体験イベントやブース展示、シギの恩返し米の販売などの活動を実施しています。そこで、バードライフ東京は、佐賀市と協力し、湿地や渡り鳥に関する普及啓発や地域間の連携促進を目的に、「シギチフェス 2021 in 東よか干潟」において、以下の活動を実施しました。

- ① 湿地や渡り鳥についての普及啓発パンフレットの作成と配布
- ② シギチフェスでの動画セミナーの実施と、湿地に関する紹介ブース設置

なお、今回実施した「シギチフェス 2021 in 東よか干潟」も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、規模を縮小せざるを得なくなっていました。そのため、探鳥会や工作などの活動は中止し、その他の活動についても実施方式を変更するなど、人が集まりすぎないように工夫をするともに、感染のリスクをなるべく下げる方法で、イベントを実施することとしました。

2. 活動内容

2.1 普及啓発パンフレットの作成と配布

湿地や、湿地に生息する渡り鳥、そして湿地の恵みに焦点をあてた普及啓発用のパンフレットを作成しました。湿地や渡り鳥などの自然環境について紹介するだけでなく、水や食料を私たち人間に提供してくれることなどの湿地の恵みにも焦点をあてることで、自然環境にあまりなじみがない人でも、湿地やその恵みに対して興味を持ってもらえるような内容にすることを目指しました。また、湿地の恵みを活かした取組を実施している複数の地域を紹介することで、読者に各地の湿地やそこでの取組に興味を持ってもらうと同時に、パンフレットの作成を通じて地域間の連携を促進することも目的としました。



図 1. 配布した湿地に関するパンフレットの表紙と裏表紙。

パンフレットの内容は、湿地に関する基礎的な情報や湿地の恵みについて、渡り性水鳥とその渡り経路について、さらには国内の 3 か所の湿地やそで行われている湿地を活かした取組についてとしました。湿地や渡り鳥への関心がそれほど高くない人でも、わかりやすい内容でかつ、読みやすいパンフレットになるように心がけました。また、湿地の恵み(食料や水の供給、災害被害の低減など)や、それらを活かした具体的な取組を進める地域の紹介をすることで、少しでも湿地や渡り鳥を身近に感じてもらい、関心をもってもらえる内容にしました。

東よか干潟(佐賀県佐賀市)のほかに、国内で重要生息地ネットワークに参加している湿地として八代(山口県周南市)、蕪栗沼と化女沼(宮城県大崎市)の 2 地域の湿地を選び、湿地やそこに生息する渡り鳥などのいきもの、湿地を活かした取組などについてそれぞれ紹介しました。これら 3 つの湿地は、「シギの恩返し米」(佐賀市)や「ふゆみずたんぼ米」(大崎市)の生産をはじめとして、湿地であるたんぼを活用して、生物多様性の保全に配慮した取組を行っており、環境教育等でも湿地や湿地に生息する渡り性水鳥を積極的に活用しています。また、東よか干潟はシギ・チドリ類が数多く飛来し、八代にはツルの 1 種であるナベヅルが、蕪栗沼と化女沼はマガンをはじめとする多くのガンカモ類が飛来し、それぞれ別々の種群を対象に重要生息地ネットワークに参加しています。そのため、3 つの地域の湿地を紹介することで、日本国内の重要生息地ネットワークを代表する 3 つの種群を対象に、それぞれの取組の一端を紹介することを目指しました。

作成にあたっては、まずバードライフ東京にてパンフレットの内容を検討し、その内容をもとに佐賀市、周南市、大崎市の自治体の担当者に連絡し、内容を検討・修正しました。その後、パンフレットのデザインをデザイナーの方に依頼し、内容や文章、イラストなどを相談しながら、パンフレットの作成を進めました。デザインについては、自然や生き物をモチーフとしたデザインを行っているいきものパレット(<http://www.eonet.ne.jp/~flowers/ikimono/>)に依頼しました。なお具体的なスケジュールについては、「3. スケジュール」に記しました。

完成したパンフレットは 2000 部印刷し、シギチフェスの当日に配布しました。また、大崎市、周南市にもそれぞれ印刷・配布したほか、日本国内のその他の重要生息地ネットワーク参加地にも配布しました。外国の方や、海外のネットワーク参加地をはじめとする湿地の関係者にも活用してもらえるように、英語版も作成し、同様に配布しました。印刷物の配布だけでなく、バードライフ東京などのウェブページでも PDF 形式で公開し、広く活用してもらえるようにしました。

2.2 イベントでの活動

2021 年 4 月 29 日(木・祝)に開催された「シギチフェス 2021 in 東よか干潟」にて、前述のパンフレットを配布したほか、以下の通り、(1)動画セミナー「湿地と渡り鳥の話」を開催し、(2)湿地や湿地を活用した取組に関する紹介ブースを設置しました。

(1)動画セミナー「湿地と渡り鳥の話」

活動計画を立てた当初は、参加者には東よかビジターセンター(ひがさす)の研修室に集まってもらい、講演会の形式で講演を行う予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、

イベントの規模を縮小せざるを得なくなってしまったため、講演会についても当初の予定から開催方式を変更して行いました。リアルタイムの対面形式での講演会は中止とし、各講師に事前に講演を録画してもらい、その動画をイベント当日に研修室で流す形式に変更しました。

講演会の内容の検討・決定にあたっては、佐賀市とNPO 法人バードリサーチにご協力頂き、講演の内容や依頼する講師を選定しました。講演内容と講師を以下の表 1 にまとめました。

表 1. 動画セミナー「湿地と渡り鳥の話」の各講演タイトル、講師、講演内容。

	講演タイトル	講師	講演内容
1	シギ・チドリ類はこんな鳥	守屋年史氏 (NPO 法人バードリサーチ)	シギ・チドリ類の代表的な種類や生息環境など、基本的な情報や特徴の紹介。
2	シギ・チドリの渡り	中村安弘氏 (荒尾干潟水鳥・湿地センター)	シギ・チドリ類の渡りの特徴や、渡りを支える環境の紹介や、有明海に飛来するシギ・チドリ類の動画の紹介。
3	日本の干潟	守屋氏	シギ・チドリ類を支える干潟について、日本にある干潟や干潟がもたらす恵み、干潟の特徴に関する紹介。
4	有明海 - 3 つのラムサール条約登録湿地	中村さやか氏 (日本野鳥の会 佐賀県支部)	有明海にある 3 つのラムサール条約湿地 (東よか干潟、肥前鹿島干潟、荒尾干潟) の魅力や、訪問する際のポイントについて。
5	シギ・チドリの今と保全の話	守屋氏	シギ・チドリ類の調査やその成果、保全について。

配信した動画が好評であったため、イベントの実施日だけでなく、イベント後 1 か月ほどビジターセンターの研修室で映像を公開し、来館者が自由に見られるようにしました。また、YouTube でも一般公開し、広く一般の方にも閲覧してもらえるようにしました。

・公開ページ: https://youtube.com/playlist?list=PL0a1eQqmygroWPm_VzvwBBe31BM2kZw9y



図 2. シギチフェス当日、来場者がビジターセンターの研修室で動画セミナーを見ている様子。

(2) 地方自治体の紹介ブースの設置

当初は、各湿地や地域の特産品（特に湿地に関連する農産物など）を販売する物産展を開催することで、より多くの集客を目指し、多くの人に湿地や湿地の恵みに対する興味・関心を高めてもらおう予定でした。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域間の人々の往来ができず、特産品の販売が難しくなってしまったため、物産展を開催する代わりに各湿地の特徴や地域の取組について紹介するブースを設けることにしました。ビジターセンター内にパネルと机を設置し、ポスターやパンフレットを置いて、来場者にポスターを閲覧してもらったり、パンフレットは持ち帰ってもらったりすることとしました。また、各自治体で所有していた VRゴーグルも活用し、来場者が湿地の雰囲気子を、よりリアルに体験できるような工夫も行いました。

佐賀市には、ブース展示用のスペースを確保してもらうとともに、机やパネルを準備してもらいました。周南市、大崎市には紹介ブースの出展を依頼し、ポスターやパンフレットを準備してもらいました。



図 3. イベント当日のブース展示の様子。VRゴーグルで、VR映像を体験する来場者(右)。

3. スケジュール

今回の活動のスケジュールについて、表 2 にまとめました。2020 年 11 月より、活動内容の詳細について、佐賀市の担当者と打合せを行った後、パンフレットの作成に着手しました。佐賀市を含めた 3 つの自治体と連携をとりつつ、デザイナーの方にも協力して頂き、印刷したパンフレットをイベント当日に配布できるように準備を行いました。また、イベント当日の活動内容については、2020 年に一度打合せを行った後、イベント開催が正式に決定した 2021 年 3 月から本格的に準備を始めました。3 月に活動内容を再度検討した後、新型コロナウイルス感染症の影響も考慮しつつ、各自治体や NPO 法人バードリサーチとも相談をしながら、活動を進めました。今回の活動では、新型コロナウイルス感染症の影響により、イベント開催の見通しが立たず、準備期間を十分にとることができなかつたことなどの課題がありました。

表 2. 活動スケジュール。

年月	活動内容		
	活動全般	パンフレット作成	イベント(シギチフェス)開催
2020/06	・活動内容の検討		
2020/07	・佐賀市担当者との相談、打合せ		
2020/08			
2020/09			
2020/10	・本格的に活動開始		
2020/11	・佐賀市担当者との相談、打合せ		
2020/12		・パンフレットの内容の検討	
2021/01		・自治体の担当者と、パンフレットの内容について相談、検討 ・写真などの素材収集	・自治体の担当者との相談
2021/02		・デザイナーの方への依頼 ・写真や紹介文章などの素材集め	
2021/03		・デザイナーの方や自治体の方と相談しながら、パンフレットの作成	・詳細な活動内容(出展内容、講演会の内容など)について検討、自治体の担当者との相談 ・動画セミナー準備

年月	活動内容		
	活動全般	パンフレット作成	イベント(シギチフェス)開催
2021/04		<ul style="list-style-type: none"> ・デザイン完成、印刷 ・イベントでの配布 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示ブースの内容の検討、出展するポスターなどの準備、送付 ・動画セミナー準備(講演依頼、動画準備) ・イベントの開催(4月29日)
2021/05	・活動手引書の作成	・英語版の作成	・イベントのまとめ
2021/06	・手引書の作成、英訳	・英語版の作成	
2021/07	・手引書の作成、英訳	・英語版の作成	

4. 成果

イベント当日の午前中は雨が降ってしまったため、来場者は多くありませんでしたが、午後には天気も回復し、最終的にビジターセンターには 300 名を超える来場者がありました。多くの人がパンフレットを手にとったり、東よか干潟をはじめとする湿地や各湿地での活動に関する展示を見たりすることで、湿地や渡り性水鳥に興味を持ってくれたと期待されます。また、コロナ禍でも動画セミナーを通じて、多くの人に湿地や有明海の干潟、シギ・チドリ類の魅力を発信することで、それらに対する興味がより高まったのではないかと考えられます。



図 4. シギチフェス当日のビジターセンター入り口の様子(左)。展示内容を見る来場者(右)。

また、今回の活動では、イベントを開催し、パンフレットの作成や動画セミナーの配信をできたことに留まらず、今後の重要生息地ネットワークでの活動や、他地域での活動に応用できるような取

組ができたと考えられます。特に、湿地や湿地に生息する渡り鳥だけでなく、「湿地の恵み」に焦点を当てた活動を行いました。パンフレットの作成やブース展示を通じて、湿地にあまりなじみのない人でも、関心を持てるような機会を提供することができました。今回のパンフレットなどが活用されて、複数のステークホルダーが連携し、湿地に関する活動が活発になっていくことが期待されます。

また、佐賀市、周南市、大崎市と複数の地域をつないだ活動を行うことができました。渡り鳥を保全するためには、その繁殖地、越冬地、渡りの休息地と、渡り経路全体を保全していくことが必要で、多くの国・地域で連携した取組を進めていくことが欠かせません。今回の活動を連携の一步として、3つの自治体で連携した取組や、さらにはその他の地域も巻き込んだ活動が活発になっていくことで、渡り鳥やその生息地の保全が一層進んでいくものと期待されます。

5. 課題と今後に向けて

最後に、今後さらに有意義な活動を進めていくために、重要であると考えられることについてまとめました。

一点目は物産展の開催です。今回の活動でも、活動を計画し始めた当初はそれぞれの地域の特産品(特に湿地の恵みであるお米や海苔、お米を加工してできる日本酒など)の販売を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、物産展を開催することはできませんでした。近年、各地で生物多様性や自然環境の保全に配慮した農産物の生産や商品の開発・販売が進められています。佐賀市で生産されている「シギの恩返し米」、大崎市で生産されている「ふゆみずたんぼ米」や「さき結」など、湿地やそこに生息するいきものに配慮した農産物や商品が増えてきており、このような商品を通じてより実感を持って湿地の恵みを享受することができます。このような商品をアピールすることで、湿地や渡り鳥についてあまり知らない人でも、興味・関心を持ってくれ、湿地を訪れたり、湿地や渡り鳥の保全に関心を持ってくれたりする可能性があると考えられます。今回は商品の販売はできず、パンフレットやポスターで紹介するのみになりましたが、今後は物産展などを開催し、各地の農産物や商品を販売することで、湿地や渡り鳥の保全に関わる人のすそ野を広げていくことが期待されます。

また、二点目としては、今回構築した連携やつながりを維持し、発展させていくことが重要だと考えられます。有明海の周辺の干潟(佐賀市の東よか干潟、鹿島市の肥前鹿島干潟、熊本県荒尾市の荒尾干潟)では、各干潟が連携した取組を進め、協力関係を構築していますが、国内の重要生息地ネットワーク参加地間で連携した取組は多くはありません。今回、佐賀市の東よか干潟、周南市の八代、大崎市の蕪栗沼・化女沼で連携した取組を進めることができましたが、このような連携を今後も維持するとともに、他の地域でもこのようなつながりを作っていくことが必要だと考えられます。今後も継続して、連携体制を維持し、発展させられるようなサポートや仕組みづくりが必要であり、自治体の担当者や現地の NGO 担当者が活動を進めていきやすいような体制を構築していくことが重要です。

今回のイベントでは、EAAFP の 3 つの種群のネットワーク(ツル類、ガンカモ類、シギ・チドリ類)

に着目して、3つの地域で連携した活動を行いました。EAAFPで着目されている3つの種群に焦点をあて、それらを広報する上では効果はあったと考えられます。しかし、3つの湿地で共通した渡り性水鳥は多くありません。今後連携した取組を進めていくためには、共通した渡り性水鳥が飛来する地域で、共通する水鳥に焦点をあてて活動を実践することで、湿地間・地域間のつながりをより感じることができ、より大きな成果を上げることができると期待されます。また、今回は国内の参加地のみでの活動でしたが、国内の湿地間の連携に加え、海外のネットワーク参加地との連携を促進していくことで、「渡り」の魅力を発信できるような活動をさらに展開できる可能性があると考えられます。

6. 問い合わせ先

本活動に関する問い合わせや質問がありましたら、お気軽に以下の連絡先までご連絡下さい。

一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京(担当:井上)

E-mail: Tokyo.office@birdlife.org

電話番号:03-6206-2941

住所:〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-13-1 ユニゾ蛸殻町北島ビル1階